

## 練馬区小中一貫教育資料作成委員会（第11回）「体力の向上」部会 要点録

開催日時	平成22年6月15日(火) 午後3時30分～午後6時30分	
会場	練馬区役所本庁舎12階 教育委員会室	
出席者	委員	米津光治、中村 隆、内田秋男、工藤智昭、難波民雄、高橋健司 畑 陽子（敬称略）
	その他	教育出版
	事務局	五十嵐浩子 統括指導主事、渡辺浩一 指導主事

### 1 挨拶

#### 委員

レジュメを見ると、学習指導案やワークシートなどの具体的な例が出ていて、全容が少しイメージできる。短期間で仕上げなければならないが、充実した会にしたい。

#### 事務局

事務局より、資料3枚目に今後の年間予定を示した。こちらで調整したこの日程で進めたい。現段階では今後、合計8回の予定。10月には資料をすべて開けなければいけないので、8回目の9月30日に提出資料を最終確認として示せるよう、逆算して組んだ。

### 2 協議

#### 事務局

本日の配布資料3、主な内容の(1)。第1回の本部会において前年度の確認や、課題や反省点等が話し合われる中で挙げた、今年度の取り組みのキーワードがある。まず小中一貫の小学校と中学校の接続であるⅡ期をどのように充実させるか。そしてⅡ期を充実させるためには、Ⅰ期でどのような取り組みができるか。それから2点目の運動の日常化。すべて単発的に行うのではなく、どう運動の日常化に結びつけるかが大切である。3点目に、今回取り上げる「体力」とは運動と知識両方の視点を持って取り組む。4点目は「小中をいかに効率よくつなげることができるか」このキーワードで今年度どのような取り組みができるかを確認する。

(2) 事務局提案と協議。今回2年目の取り組みとして作成する資料は、大きく二つに分かれ、まず一つは①学習指導案、教師が扱うもの。②は児童生徒が活用するワークシートや資料。そして体力向上でどういうものを作成できるか前回か話し合ったのが、アからエである。

まずア、小学校の体育の授業の指導案を、中学校の教員が入るTT授業で作る。学年はⅡ期の小5か小6、種目は器械運動がいいのではないかと。前回小学校の先生にどの種目がいいか検討いただき、器械運動の指導を苦手とする小学校の先生が多いとの意見が出た。この指導事例は他校の先生が見ても非常に参考になり、体育専門の中学校教員から指導のポイントやノウハウを協力してもらい指導できるのではないかと。もう一つ、小学校と中学校の体育の授業の大きな違いが集団行動だ。中学校では非常に厳しく指導している学校が多く、5、6年に集団行動

の要素を取り入れて、滑らかな接続ができるといい。イの健康安全・体育的行事。小学校で行われる縦割り班による体育集会や運動遊びを4年と7年のきょうだい学年で取り上げて、体育的行事の指導事例を作成したらどうか。当初は小1から中3までを含めた体育集会等の意見もあったが、そこまでまとめるのは難しい。ウは、先ほどの運動とは別の、健康面にせまる授業の指導案を作成したらどうか。学級活動等でもかまわない。エは、本区の全校で行っている小3から中3までの新体力テストの結果の活用の仕方、それから体力に関する知識を、学級活動等を通して生徒に指導する。特に小学校の学習指導要領では、体力を扱うことがない。そういう意味で扱ってもいいのではないか。これが教師の立場で行う指導案として前回話し合われた4点の内容である。

②は、子どもたちが扱うワークシートや資料である。まず前年度、体育で大きく焦点をあてた「体づくり運動」の運動事例集を作成してはどうかと話が進んだ。現在、運動事例集は文科省から小学校低学年用にパンフレットが出ているのみ。小5以上の体力を高める運動や中学校の「体づくり運動」の体力を高める運動も、運動事例集などはない。このパンフレットを参考にしながら、さまざまな運動をイメージとして子どもたちが理解できるよう、小1から中3までの「体づくり」の運動事例集をイラスト入りで作成してはどうか。

本区では特に小学生の破折事故、歯を折る事故が非常に多く報告されていて、転び方、身のこなし方、敏捷性や巧緻性を高める運動につながる視点を持った事例集を作りたい。もう一つは本区の新体力テストの結果で課題となっている種目、敏捷性や瞬発力、投能力や全身持久力を高める運動事例を紹介してはどうか。

③に部活動があるが、今回この小中一貫の部会を設置するにあたって、部活動の活性化が大きくキーワードとして入っている。いま桜小中で行われている実践事例を今回の報告に入れ、今後ほかの学校で小中一貫や連携の教育が進む中で参考になればということを示した。

前回の記録、そして話し合われた内容については以上である。

#### 委員

アについて、前回跳び箱やマットなどを中学の先生と一緒にやるのは、小中一貫の価値があり、一番指導で困惑するところなので、事例としていいのではという話だった。

#### 委員

もしそこでやるのであれば、中学校の体育の専門性をいかして中学校の先生がT1にならないとおかしい。例えばリレーやサッカーは指導技術がなくても運動特性そのものが楽しいので、苦手な小学校の先生はそういうところに逃げてしまい、運動特性としてそんなに楽しくない器械系はできるだけ扱わない。

#### 委員

この前の話では、基本的に小5、小6は小学校の先生が行っている授業で、空き時間を捻出して連携、サポートをということだった。また、今は敷地が一緒だが、違うところで連携をはかる際にも参考になればと、T1はなるべく小学校にした。

#### 委員

小学校は達成型の学習過程を重視するが、中学生の場合はどちらかという困難を克服する時に精神力が出てくる。その辺の指導観の違いもあり、指導案を立てる時にはかなり話し合えないといけない。ごく一般的な指導案を作っただけでは通用しない。

#### 委員

中学校は挑戦的なものが多くなる。昔に比べ、できる子とできない子の差は広がっている。

#### 委員

中学の先生がいきる場所と、小学校の教員がいきる場所がある。例えば発展させた高度な器械運動の技に子どもがつかずいた時は、中学の先生が専門的な指導をし、下のほうの跳び箱を飛ばないような子どもたちは小学校の教員が中心に面倒をみるなど、役割分担をはっきりさせた指導案を書く必要がある。

#### 委員

中学校は、同じマット運動でもできる子はどんどんできるようになるので、ある程度能力別に分けてできた者は上にあがることが多い。

#### 委員

小学校の先生でも器械運動が得意で教えられる方もいるし、そうでない方もいる。基本的には小学校は学び方を学ぶ部分が多く、中学校の場合は基本技能が重点化されるので、それをうまく融合させればかなりいい。今の小学校の研究会を見ると、学び方を学ぶあまり、マット運動でも技能を身につけないまま低いめあてでいいとする部分もある。それは技能を教えられない人が多いからで、中学の先生のサポートでそれを補えばいい。T1、T2 で役割分担を明確にした授業をやるのは、器械運動ではかなりいいと思う。一番難しいのは連携で、指導案を作る時もそうだが、実際に行う時は綿密な打ち合わせをしなければいけない。その辺りは実際に行う時のレベルになるが、理想としてはすごくいい。中学校の先生が小学校の授業の雰囲気を見て、小学校の先生が中学校の先生の指導を見て、お互いいいところをうまく取り込むのはかなりいいアイデアだ。それをどう指導案に盛り込み、実際にやってもらって結果を出すかである。

#### 委員

例えば普通の授業で、小学校5年生のマット運動ならばこのぐらいの技術と、ある程度ラインはあるのか。

#### 委員

基本的に副読本に示されている技がベースになる。ただ実際はできない。前転を連続するだけで大変。できない一番の原因は先生が怖くて指導できないから。

#### 委員

中学でも実技の本を見てもできない。どこまでできないのが許されるのか。

#### 事務局

学習指導要領で示されている、これからは最低身につけさせたい基礎基本辺りを押さえつつ、そこに達していない子、できている子を連携する。あと中学校の先生には、始めるラインが実際は違うことを、小学生を教えながら見ていく。あと中学校の先生が入ることで子どもたちが「中学校ではこういうこともやるんだ」というイメージを持つことが大事だ。

#### 委員

小5、小6が対象となると、まずは小学校の指導案を作り、それに中学校がこうしたほうがいいのか、中学ではこれができないから、もう少しこういうのをやったほうがいいのかなど、お互いに分かってくる。

#### 事務局

子どもの実態にもよる。中学校の立場で話をすると、例えば小学校から上がってくる子ども全員が前転、後転ができていれば、そこからの発展は非常に広がる。それを中1でまず教えないと器械運動が成り立たなければ、そこに力を注ぎ込まざるを得ない。そういう観点からすると、例えば小学校から中学校に上がる段階で基本的な前転、後転がある程度できるように、中学校の教員が小学校の体育でどうかかわれるかという視点もある。それができている子どもたちであれば、さらに発展的な技能の習得を T2 で課することができる。先生方が話し合う中で、実態がどうか、どこに中学校教員の T2 を入れると一番メリットが大きいか、指導案として示せるといい。

#### アドバイザー

これは一つの事例で、仮にマット運動の小中の TT の指導事例が出たとしても、それぞれの先生が持っている専門性や力量の違いによって、同じような授業ができるとは限らない。われわれが求めているのは、小中一貫で小中の先生が具体的に連携をとる時に何が問題になり、何が大事なのか。結論から言えば、今までのような器械運動は克服型だという発想はまずい。例えば小学校では個人ではない集団のシンクロ跳びや集団演技なども大々的に取り入れている。だからⅡ期に小中で TT の授業をやるのであれば、中学も含めたスパンの中で、単元の考え方としてこんなふうに考え、5年生ではこんなことを味あわせたい、6年ではこれを大事にしたい、7年ではこれを大事にしたい、だからこんな指導案ができたというのでない。

先ほどの T1 が小学校なのか中学校なのかというのは、一つの例で、そのままやってくださいということではない。その時には何が一番問題で、何をすることが一番大事なのかをもう少し明確にしたほうがいい。

#### 委員

ではイの健康安全についての体育の指導事例集、縦割りによる指導事例集について。

#### 事務局

1年生から9年生までがいる一貫校だということを最大限活用してほしい。基本的には小1と2、3と4というよくある組み合わせだが、7学年と小4を交流させるなど、一貫校だから

できることに注目していただきたい。例えば、表現力の部会ではお兄ちゃんたちが小さい子のところへ行き、自分たちの詩の朗読を聞いてもらうことや、キャリア教育でも生活科の学校探検で中学校の校舎も探検して、それを迎える中学生はどんな準備をしたらより効果的かも考える。普通の学校でやっている指導案の考え方とは変えてもらいたい。

#### 委員

初めて桜中の先生と話をした時に、中学校は集会などをやる余裕がない。これは小学校の発想だ。定期考査や修学旅行などいろいろあって、集会や縦割りなどやっている余裕はないと思った。だからこれを中学校でやるのはかなり大変だ。

#### 委員

縦割りはないと思うが、学年の中のレクリエーションはないことはない。

#### 委員

せいぜいあっても合唱コンとか。作品展と言っても廊下に飾るぐらいで、展覧会的、学芸会的な要素はない。それをどううまく小学校と融合させるかがすごく問題だ。

#### 委員

5、6時間目の2時間を使った学活とか、あるいは総合に引っ掛けて何かをやるとか。全日を使うのはなかなか難しい。

#### 委員

体育科の先生は体育科できっちりカリキュラムがあり、そこには集会的な要素のもの、例えば運動会の練習とか集会の準備などに使う時間はない。だからそういうところが学活とか総合の時間にいつってしまう。でも総合には本来的な目的があって、そんなにいい加減なことはできない。そうなるとどこにこの時間を持っていくか。

#### 事務局

集会一つでも、例えば小学校の場合、朝学活でやっている全校朝礼の時間帯で、音楽集会などをやるが、中学校は今のように5、6時間目を使うとか午前中全部使うという発想になる。これが必要かどうかや、小中一貫ならではの発想を提案いただきたい。実際にやっている中学校もある。体育集会のような形。朝やったり。それが子どもたちの運動の日常化にプラスの影響があるなら。

#### 委員

中学校で何かそういう事例はあるか。

#### 委員

今はとにかくモジュールをやるのも時間がもったいないので、基本的には…。

#### 委員

中学校は全校朝会も毎週やっていない学校もあるそうだ。だから朝とるのは大変なことだ。でもやろうと思えば1年間を通して月1ぐらいできないことはない。

#### 事務局

生徒会朝礼、学年朝礼、全校朝礼と朝礼をする曜日が決まっている学校は結構ある。全校朝礼は月1回、学年朝礼は1回、その中に1回混ぜるとか、月1回が無理なら2か月に1回とか。

#### 委員

目的は異学年交流か。それとも定期的な体力向上か。

#### アドバイザー

小学生と中学生一緒に活動がなければ小中一貫にする意味があまりない。それが恒常的に必要かは別にしても、そういう可能性があるのであれば、異学年のスポーツ交流のようなことが考えられるのではないか。確かに中学校は時間的に厳しいかもしれないが、一方で地域の保育園や社会福祉施設に行き交わっている。そういう時間を小学生に置き換えてみれば、年下の子どもたちとのかかわりが一石二鳥になる、そういう考え方はできないかということ。

#### 事務局

運動する楽しさを味わえる情意面のところで、前回お配りした文科省が出している、全国のさまざまな体力向上の取り組みの中の、小中一貫の縦割りグループによる特別活動の工夫と成果のところにはスポーツ交流会とある。中学校が小学校をリードして交流会を進めることで、中学生のリーダーシップなども育まれると出ている。ここには大縄跳びや綱引きやボール投げ、輪投げ等を行ったとある。スポーツ交流会を通して、小学校と中学校の子どもたちが縦割り班で集まって、昼休みに練習などをする姿がよく見られたという実践例だ。これを今回桜小中で、きょうだい学年のイメージで、行事の指導案を一つ示せればと前回話し合った。

#### 委員

使う時間帯には触れずに、こういうものがあるからこの時間帯を使おうということか。1日の生活の中でモジュールにするのか、それとも保健体育の時間、総合の時間、学活の時間というのが何かあるのか。いま私が思い描いている縦割りの取り組みのイメージとは、ある時間に上級生がリーダーシップをとって引っ張りあげ、子どもたちに楽しさを味わわせるもので、やるにこしたことはないが、どの時間を確保するのか、何の時間でやるのかが見えない。

#### 事務局

いろいろな方法があるかと思うが、この指導事例は特別活動である。

#### 委員

特活というと極めてあいまいな、年間の中で適切に配慮するというだけの、学科自体に時数がないもの。打ち合わせをする時間、子どもたちに指導していく時間、一斉指導ではなく教員

が上級生に指導し、上級生が下級生に指導する時間の確保が必要で、それは放課後しかない。

#### 事務局

私も以前こういった指導をした経験があるが、そこでは中学校の子どもたちが昼休みなどに小学校に声をかけて話し合いをした。時間の捻出は非常に難しいが、その中でこういうことをやろう、今度ここで練習しよう。その代わり準備段階が大事で、中学生はそこでまたお兄さん、お姉さんになる。準備が数週間で1回の開催。その代わり開催自体はほぼ教員が入ることなく、中学生が司会から何から進行した。

#### 委員

今、可能性を探っていたのだが、桜小中でやるとすれば持久走だという気がする。持久走は中学校でも入っている。桜小でも持久走大会をやっている。その時期、中学生はちょうど定期考査なので、期間をうまくやれば練習できる。

休み時間に練習し、大会の日に向けて自分のタイムを少しでも縮めてがんばる。中学校のようにタイムをねらうのではなく、2キロくらいを休まずに走りきるのが主なめあてだ。例えば桜小中で持久走をやるとしたら、受験の関係で9年生は無理だとしても、7、8年生がかかわることはできる。ただ休み時間をうまく合わせるのは難しく、授業の始業も違うので、時程を考える時によほどうまくやらないと駄目だ。桜小中でも時間をやりくりし、音楽がかかっている間はずっと走り続けるのならできると思う。

#### 委員

それにどういふふうで中学生がかかわっていくか。

#### 委員

学校行事の精選に伴ってきつい部分も削いでしまったので、今マラソン大会をやっているところは極端に少ないのではないかと。練馬34校で何校あるか。

#### 委員

20校ぐらいはあるのではないかと。

#### 委員

今のは、大会を設置し、朝や休み時間に自ら体を動かすキャンペーンをして体力向上をはかるということで、運動に対する体力向上の啓発だ。いいとは思いますが小中のかかわりはない。小中がかかわる目的は、小さい学年は中学生に手ほどきを受けて運動ができて運動好きになる。中学生は、教えるのならば知識も知らなければいけないし、コーチングのノウハウや実技もしなければいけないので、運動に対する理解などの意味がある。あと異学年交流をやるとすれば組み合わせによって内容も変わる。かなり条件的に厳しいし内容的にも難しく、ねらいをもう少しはっきりさせないと意味がない。先ほどのマラソン大会はいいアイデアだが、交流がない。交流を打ち出すと内容が決まる。例えば大縄であれば教えたり跳ばせながら見本を見せるとか、一緒になって跳んであげるなどいろいろあり、それは何年と何年の組み合わせがいいのか。時

間は取れないためきつい。特に中学校では、学級活動しかない。

#### 委員

自分がやっていて楽しくないと食いつかない。それと運動的な部分のつなぎ合わせで時間がとれるのはいつか。9学年にまたがり欲張らないで少しずつできること。例えば昼休みに体育委員会主催で「今日はPK大会をやります。サッカー部のゴールキーパーがいるので自信がある人は昼休み校庭に集合してください」とレク大会をやったりする。好きな人が集まり体育委員が仕切ってやるという、運動的な部分で一つの行事を生徒会で作り上げる取り組みがある。そんなレク的な部分と、持久走のように鍛える部分、交流の部分でどこまで広げられるのか。

#### 委員

桜小中では1年から4年までが45分授業、5年から9年までが50分授業で時間が全然合わず、そうすると共通の時間は朝しかなく、始業の時間も違う。ダブっている時間は昼が一番長いかもしれない。5、6年生は中学の時間に合わせて50分授業なので20分休みもない。

#### 委員

時間の設定がそうならば、中学校が対象とすべきは、やはり主に5、6年生か。

#### 委員

1年から9年の4と5の間に仕切りを設けているので、4が従来の6の役を果たさなければいけない。逆に6は真ん中になり、今までの小学校を仕切っていた意識はもうなくなる。

#### 事務局

それは意識転換として。高橋先生のアイデアはありだと思ふ。例えば5～9までで、昼休みにサッカーやバスケのシュートという設定もあるかもしれない。小学校の1～6までの中で何かできるものがないか。例えば集会一つにしても6年生までできていることで中学生になってやらない。習慣的にやらないことが多いので、その辺り大人がどうアレンジできるか。

#### 事務局

昨年、副校長先生の会議の中でとった体力向上に向けた取り組みのアンケートで、小学校で体育の授業以外に行われているもの、これはダントツで持久走と縄跳びだった。中学校になるとこういう活動はなく、ほとんどが体育の授業で体力を上げるとの答えだった。小学校で取り組んでいるものを活用すれば、持久走と縄跳びが比較的移行しやすい。全身持久力は本区の大きな課題なので、持久走に取り組むことには大きな意味がある。一方、取り組み自体はいいが、その場合にはガイドラインをしっかりと作らなければいけないという側面もある。もう一つの縄跳びも本区の四つの体力の課題の中の三つ、敏捷性・瞬発力・持久力に多くかかわってくるので、桜小中の9年間続けられる取り組みとして意味があり、実際的でもあると感じた。

#### 委員

中学は制服があるので気軽に縄跳びできない。縄跳びは休み時間に気軽にできないと流行ら



ない。中学は時間もないし、体育で縄跳びばかりやるわけにもいかない。

**委員**

中学は昼休みぐらいしかないので、小学校とは違う。昼休みは運動しているのか。

**委員**

貸し出したボールなどで、校庭でサッカーや円陣バレーをやったりする子どもはいる。

**委員**

縄跳びと言われても、みんなの意見を聞かないとなんとも言えない。  
標準服検討委員会が1年から9年まですべて制服に決めた。

**委員**

団体でやるのも個人でやるのもあり、中学生のかかわりは持久走より縄跳びのほうがある。

**委員**

検定表のような縄跳びのカードを作り、ある程度大きい子が検定委員のように見本になったり、こうやって跳ぶと教えることはできる。ただそれをやるのは、昼休みしかない。  
桜中は校庭で遊んでいるのを見たことない。桜中は体育の時間以外、校庭に誰もいない。

**委員**

そこから改善しないと駄目だ。中学生になると目的意識が強くなるので、小学生のように日常的に楽しみながらやるのではなく、常に何か設定してそれに向かっていく働きが強くなる。そこが難しい。また、運動会の種目だから、マラソン大会に向けて朝の時間を使おうと目的があってやるのはいいが、交流となると、中学生に目的意識をどう持たせるかが難しい。

**委員**

そういう意味で持久走よりは縄跳びのほうがあるかと思う。

**アドバイザー**

一つの視点として、かつて地域にあった年齢を超えた遊び仲間が欠けてしまったので体力が低下し、人間関係の問題も出てきているという指摘がある。あえてそれを、Ⅲ期とⅠ期、Ⅱ期の子供たちの中に、学校が意図的に遊び仲間レベルのペアグループのようなものを作る。行事や一つの大会を目指して小中学生がスクラムを組むのではなくて、もっと気楽に。そういうことと言えば学校行事や特別活動の時間が、捻出しやすく説明もつく。あまり必修教科ではやらないほうがいい。

**委員**

いま言った通り、中学生側に体育委員など毎日縄跳びを回す当番がいて、昼休みに開放して小学校1、2、3年生の来たい子たちが来て何回跳べるかやろうとやることは可能だ。そして

ら多分、遊びに来る。上級生が回し当番、跳ぶのは低学年というレクリエーションを昼休みにやる、それだけでも十分体力の向上になる。

#### アドバイザー

極端なことを言うと、われわれ大人が、大縄がいいと思い込んでやるのが本当にいいのか、本当は子どもたちがやりたい中から自由に発想させたほうがいい。ただ大事なのは学年や年齢を超えてかかわる、しかも体を動かす体験を意図的に仕組むこと。それは今までも各校種や各学年でやっていたが、小中一貫ならではものをここで打ち出したほうがいい。

#### 委員

休み時間に縦割りでこんな運動遊びで遊んでみたらどうかという提案にとどめるならば可能。体育集会と言ってしまうと、時間はどうなるのと、内容は、などになってしまう。すぐに指導案を作ったほうがいいという話ならば例示のほうがいいのではないかな。

#### 委員

システムとしては当番を作るだけで、毎回開放されていれば遊びに行きたい子は行くのではないかな。

#### 委員

特に限定しないでレクの的に開放していき交流させる、イはそういう形でまとめたい。ウの指導案にいく。体育授業の中には入らないので、やはり学級活動の中の動きになるのか。

#### アドバイザー

今も昔も実際に体を動かしたり、それにかかわる知識は体育・保健体育が必修の教科として担っているし、これからも担う。けれども運動の日常化や実践、運動習慣の確立などが体育・保健体育で無理なことは分かっている。それをどこでやるのか。保健などで学んだことをどう家庭や地域で実践していくかは、学級活動がやりやすいのだと思う。考え方としては、必修教科で学んだこと、身につけたことをそれ以外のところでどう実践するか、あるいは確かめるかという観点でいい。例えば小学校で家庭と連携をとりながらやっている生活習慣調査のようなもの中学生バージョン、できるかどうかは分からないが、そういうことである。

#### 委員

例えば生活習慣の何が大事か勉強した時に、自分の生活計画表を作ってみるとか、薬物乱用だったら啓発ポスターを作らせるとか。そういう活動は保健ではできないので発展的な活動として学級活動で実践したり、教室や家、地域に貼るなどが考えられる。それを段階に合わせて、例えばインフルエンザ、病気の予防であれば、合わせて勉強したことを実際にどのように広めるかとか、生活に根付かせるための活動であれば小学校の指導案が1～2例作れる。保健は知識で終わるのでそこまではやらない。実際何をするか考えさせて活動するところまで発展させていないので、時間がとれればいい学習になると思う。

#### アドバイザー

低学年に保健はないが、学級活動などを通して知識や科学的な理解などの働きかけが具体的にどこでどういうふうに行うことができるのかを考える、そういう意味では小中一貫の9年間の中でという話になる。本来は9年間で何が必要か、この時期にはどれが必要なのか整合性をとらなければいけないが、難しいので、例えばⅡ期にはこういうことができるのではないかとマトリックスの中にはめ込むと落ち着く、今はそういうことで作業を進めるという話だった。

#### 事務局

私が思う一貫校のイメージは、資料にある心の教育の推進部会のマトリックスプラスどんな学習指導案を提案していくかというもので、丸のついたところをやる。9年間かけて規範意識を醸成していく時に、1年、5年、9年のここで9年間の流れを押さえ、5年でこれをやるのが大事なのだと理論構築して私たちはこの授業を開発した、使ってくださいという形になる。それを体力の部会にも、提案いただきたい。中学校も小学校も自分の学年あるいは教科にはとても一生懸命だが、縦は意外につながらない。一貫の9年間を見通して「今これをやっておくと後につながるのだ」。あるいは4年生の先生が「1年生の時みんなこういう学習したよね」、中学校の先生が「小学校の時こんな勉強したじゃない」と言ってあげる。それで子どもたちもこの1時間はどこかにつながっているという気持ちになる。意識していることは大事だ。このマトリックスはこちらで作る。

#### 事務局

文科省の指導事例で、北海道の下幌呂小学校が生活習慣のチェックシートを作っている。こういった取り組みは練馬区でもあるかと思うが、例えば開始するにあたり、学級活動を活用して「やっぱり睡眠って大事だよね、食事って大事だよね」「どうして大事なの？こういうことが体にいいんだよね」というような指導を何週間か行ってみる。その例示をここに載せた。

#### 委員

例えばウの場合、学級活動等の指導案をいくつぐらい挙げるのか。

#### 事務局

それは全体のバランスだ。皆さんに開発いただく総量は70ページぐらいの予定である。

今いろいろなところで使われているものに、小中一貫教育校だからできることや、それをやることで期待される成果などを加味してもらい、先ほどの丸のついた次やその次あたりを見ていただきたい。これを取り上げたのはこういう理由がある、ここが足りないからここを重点的に今回提案した、あとの学年は自分たちでがんばってねというような、理由づけをきちっと押さえないといけない。

#### 委員

エに行く。体力テストの活用について、それから知識関係の教師向けの指導案である。

#### 事務局

本区は小3からすべて体力テストを行っていて体力の状況を把握してもらっているが、中学校のように体育の授業を使って振り返る時間の保証が小学校にはない。

体力の運動のみならず知識面の充実もあるので、体力テストの結果が返ってきたタイミングでもいいし、やる前でもいいかもしれない。体力テストの意義や体力に関する知識面のことを学級活動等を使って指導する指導事例を示せないかということ。

#### 委員

僕が前にやっていた古いスポーツテストの3枚つづりの資料を持ってきた。遊びと関連づけた、学校での遊びや少年スポーツにかかわること、それから階段上りなどの日常化をどうするか。あと体育では、目当てを書かせる時などに運動面でこれがんばるなど書かせて意識づけを行った。

#### 委員

この運動をやるといいという所見がすべてコンピュータで出てくる。それをどう日常化させていくかがまだ確立されておらず、家ではできないので、小学校でとても大きなウエイトを占める休み時間の遊びを活用する。たかだか20分遊ぶだけでも年間でトータルするとかなりの運動になるので、そこは見逃せない体力づくりの部分だと思う。

#### 委員

中学校では保健体育の時間で返している。基本的にはあくまで東京都の平均で自分たちの学校がいかに落ちているかと、底上げの啓発に使うだけ。具体的に新体力テストの種目に関してここが弱い、あそこがいいというデータまでは時間がなくてやっていない。

#### アドバイザー

理想を言えば、本来小学校段階で体力の意味やなぜそれが必要なのか、具体的にどうやるとどんな力がつくのか学んだ中学生が、中学生なりに自分の体力の結果を見て自分で考えて運動を選択し、生活設計をするレベルにいかなければいけない。そういう指導事例や指導のアイデアがここで出てくるといい。

#### 委員

ここ数年体力はずっと低下していると言われ、今回のこの体力向上部会の一つの目玉だと思う。正直盛りだくさんだと思ったが、新体力テストの結果では小学生も中学生も課題が残っている。これからはこういうことを向上させなければいけないと教員がフォローする指導も一つの柱として必要だが、異学年の交流で体力とはこういうこと、例えば敏捷性はこういうものでこういう運動をすると向上するということを中学生が小学生に指導する。プラス新体力テストの結果、こういう運動をするとよいというのを見ながら、例えば縄跳びをするとこのように向上するから今度の昼休みに中学生が回すとアナウンスをし、それをつなげていくのも一つの方法だ。継続性がないのが気になるので、そういうねらいなどで一本化がはかれればいい。授業は総合などを使ってもらわないと非常に厳しい部分が出てくる。

#### 委員

一貫で有利になるのは、データの積み重ねができること。3年から9年まで7年間のデータの積み重ねができる。その7年間の中で知的理解と運動の例示を含めて、何をどの学年でどのように与えたら効果的なのか、ちゃんと突き詰めなければならない。

#### 委員

問題は指導者が、個に応じたアドバイスしなければいけないので、かなりハードである。担任がどの程度できるか。やはり日常化は難しく、体力テストの結果をどうにかするかは、どこの学校の体育研究でも困っていると思う。

#### 委員

個人個人の体力ファイルのようなものを7枚蓄積して、それに教員が指導を加えていく。ほかに7年間できるところはなく、一貫の強みになる。指導法に関して研究する必要はあるが、健康診断票と同じような形学校で保管しておけば、個人のデータはかなり出てくる。

#### 事務局

親に見てもらって一言書いて戻してもらえば、コミュニケーションツールのような形になる。

#### 委員

よくあるのは同じぐらいの体力で、中学で運動部に入らなかった子と入った子。顕著に出る。

#### 委員

男女で出てくる平均値とか、いつも都や全国に比べて平均が低い種目の平均値を上げるためにどういうものをやらせるかとか、全体ではそれしかできない。

#### 委員

あとは自分の特徴に気づかせること。得意な運動能力、ちょっと落ちている運動能力を意識させた取り組みができる。どの段階でやるか。それさえできていないのが現状。4、5年生でやっている中学の部活動選びなどでも参考になり、効果はあると思う。

#### 委員

運動の効果はあるという指導がこの時期は大事だということであれば、例えば部活動説明会の時に、体力の客観的なデータを見せてそれをやればいい。個々の体力に対する取り組みや生活習慣についてのアドバイスなどを否定するわけではない。でもそれは個人レベルの問題で、今ここで資料として提示しようとしているのは、学年とかⅠ期・Ⅱ期という大きなくくりの中で、すべての子どもたちにとってのタイムリーな指導には何があるのか、必要なのかだ。そういうことを明らかにした事例が出てくればそれで十分である。

もう一つは7年間の積み重ねで、これは学校としても指導者としても、子ども自身にとっても財産だ。自分の体格や運動能力がどう変化してきたのかが一目瞭然なものは絶対に必要だ。

**事務局**

今までの積み重ねのプラスの部分に着目させることは、子どもたちの成長や、自分を肯定するのに効果がある。

**アドバイザー**

卒業証書と一緒に、7年間の体力の足跡のように返したら、子どもはきっと喜ぶ。小学校からの積み重ねが最後に子どもに返っていくのは今までないのではないかな。

**委員**

既成のソフトでも打ち込めば9年度の個表のデータはある。

**委員**

全員やるのは無理だから、例えば来年、小学校3年生から作っていくのはどうか。

**委員**

桜小中に来ると一貫校に通った特典として、自分の7年間の体力データが残りますと売りになる。例えばこの時バスケ部に入ったからこれがすごく伸びたということのを売りにしてもいいのではないかな。

**事務局**

業者対応もあるが、毎年出てくる体力調査の結果を、子ども自身が今年はどうだったと自分で入れていくのも一つ。自分で手を加えることで自分の作ったデータにもなる。小3から中3までのグラフができていて、そこに自分でポイントを打っていただけでも足跡を見られる。

**委員**

保健室で使っている健康カードの感じでいけば、6年はパソコンの入力を教えればレーダーもできるし、グラフもできる。それをどう教員に落とすか。こういう手順で、こういうねらいでと示さないといけない。紙で残っていれば、7年間はすごい変容があるのでいいと思う。

**事務局**

何か7年間でグラフ化されて視覚的に見られるもの。

**委員**

うちの中学校ではワンダフルスポーツという冊子を副教材で買って使い、3か年分自分で記録するところに必ず書かせている。

**事務局**

そのイメージだ。その7年間のバージョンがあつたら非常に貴重なデータだ。今、指導案としてエの体力テストの結果活用があるが、考え方によってはこれを②の子どもたちのワークシートに持っていく。小3から中3までの種目があり、記録が折れ線グラフになるように点を打

てばいいだけの子どもたちが転記する7年間の資料。それを卒業と同時に渡すことで継続の面など、子どもがじかに作成に携わることにも意味も出てくる。そうなる指指導事例よりも、子どもが使うワークシート・資料を作成しても大変意義がある。

#### 事務局

私は両方でいいと思う。先生方に指導資料集としてお渡しするのは、学習指導案プラスワークシートのセットだ。そしてCD-ROMにはワークシートだけ収め、プリントアウトして子どもたちに配る。あるいは印刷して使うイメージ。CDと紙ベースの両面でやってきたい。

#### 事務局

次に児童生徒のワークシート・資料について、いま「体づくり運動」の運動事例は文科省からは小学校の低学年を対象としたものしか出ていないので、小学校の高学年や中学校における運動事例集もイラスト入りで1個作れないかということ。

それは授業の「体づくり運動」に活用することもできる。例えば中学校は体育の授業の導入に体力トレーニングを入れたりするので、この事例集をヒントに体力トレーニングに合わせた運動を入れることもできるし、運動遊びに活用することもできる。授業の中で子どもたちができそうな運動を選択するのもにも使え、いろいろな用途が出てくる。さまざまな例示の運動事例集が一つできるといい。練馬区で課題になっている敏捷性や瞬発力、投能力に少し厚みを持たせた運動事例が示せればと挙げた。

#### 委員

事例でいいのか。カード形式にはしなくていいのか。

#### 事務局

それはまた皆さんで話していただければ。おおもとなる事例集が一つあり、それを次の段階で先生方に自分の授業に使いやすい形に作っていただきたいというもの。

#### 委員

アについては運動事例集ということによいか。昨年度もイラストで出したので。

#### 委員

二つ目の安全な転び方や破折事故は、まさに、前に倒れた時に手をつけて、転がってというのを動画モーションでイラストに起こしてくれると分かりやすい。この間の新聞でも、顔面を打つ子が多いということでいま接骨師会が小学校にきて安全な転び方を指導している。各地区でそういう事例がある。

#### 事務局

前回の原案では、生徒が開発した「練馬何とか体操」を子どもたちにやらせてもらってビデオに撮って入れられないかと言ったら、それは無謀だとなり、ここに落ち着いた。

#### 事務局

数ある「体づくり運動」の運動事例の中で、転び方にかかわる運動事例があれば、積極的にここに取り入れるといいのではないか。またその運動事例がなければここで提示して載せるのも一つの方法だ。実際に破折事故は本当に多い。

破折という場合、ほとんどが歯で、あと骨折とか。そのまま手をつかないで顔面から落ちてしまったとか、校庭の遊び場で接触し、そのまま倒れて歯が折れてしまうなどが多い。

高橋先生が手を後ろにこうつくか、こうつくかで全く変わると言ったが、そのような事例も非常にヒントになる。そのような視点を持ちながら事例集を集めてはどうか。

#### 委員

いいと思う。「体づくり運動」の中に身を守る運動のようなものを入れる。今はそういう位置付けはないが、あえて入れて、安全な転がり方を提案することも大いにいいことだ。今は体育の授業しかないが、身を守るなど安全面、何か反射的に手を動かすようなものも体づくりの一つと考えれば、大いに提案力がある。それを「体づくり運動」の中で楽しみながら身につけさせる事例ができれば。そして押さえるポイントがイラストになれば、一番理想的である。

#### 委員

ではアについてはそこにある形で、3本立てぐらいでイラスト入りの事例集を作っていくことでよいか。最終的には①と②でページ数も決まっていて、それを割り振っていく。

③の部活動について、桜小中で実践しているものを話してほしい。

#### 委員

いま6年生は仮入部を経て入部希望を取っている状態。今の6年はどんどん部活をやっている、6時間目の授業が終わったら学校で着替えて準備し、そのまま中学に行く。今は再登校せずにそのままやっている。6年生は本入部なので3月～10月は6時半、11月～2月は6時。9月からは5年生も対象になる。5年生も、試行錯誤しながらやっていく。6年はもうかなりの子が入っていて親の関心も高い。誓約書と入部届けのプリントがある。今後、小学校の教員が部活にどうやって参加するかが一つの課題だ。どこまでかかわるのか。桜中は野球部など6年生が入ってやっと試合に出られるので、野球部などは大歓迎である。中体連所属の大会には出られないが、個人的な大会あるいは区民大会などには出られる。ただ中体連の大会を目指してやっている時に6年生が邪魔にならないか、それもまだ今後の大きな検討課題だ。

#### 事務局

現段階で希望を出している6年生は何割ぐらいか。

#### 委員

もともと6年生が70人ぐらいいるが、桜中へ行く子は30ぐらいしかいない。その半分もいない。



アドバイザー

小学校の先生が部活の顧問をという話だが、クラブ活動そのものは残っているのか。

委員

クラブは残し、中学生が参加して一緒にクラブ活動できないか模索している。時間が中学生と合わせられるのかもある。

アドバイザー

5、6年生の課内活動というのは、クラブ活動の位置づけで6校時をやるということ。昔の中学校の部活代替のような考え方でいいのか。

委員

代わりではない。部活は部活。木曜の5、6時間目はクラブだ。クラブは全員参加で新たに入る。以前中学に必修クラブのようなのがあって、必ず全員がどこかに属した。

事務局

そこしかすり合わせるところがなく、それでないともうできなかったのだ。

委員

苦しいところで、部活に参加している子はクラブに出なくていいとなると、学習指導要領に書いてあるのでそれでいいのかということになる。その辺は五十嵐先生にも相談しながらやっとな落ち着いた。文面自体は中学の先生が作っているので、課内とか課外となっている。

委員

今の課外とか課内などはもう、前々回の学習指導要領のものだ。

委員

中学の先生がうちの職員室に来て話していくのもやっとなできるようになった状態。現段階では小学校の先生がどうかかわっていくかはまだ決まっていない。一貫になれば特に、中学校の先生にお任せというわけにはいかない。どうかかわっていくかが課題だ。

あと部費や大会参加費など、集めるお金についても誓約書に書いてあるようだ。

アドバイザー

仕事を増やすようで心苦しいが、小5から部活動に参加してよかったのか。体力面、精神面などで負担になったとか、余計なトラブルを抱えてしまったとかそういう検証は、どこかでしなければいけない。

事務局

それは、開校後3年ぐらいをめどに、成果と課題という形で発表いただく心づもりがある。

**委員**

先週の土曜日に中学校の運動会で6年生と8年生が組体をやったが、それぞれいいところで刺激しあっていた部分はある。

**事務局**

私はすごく感動した。こんなにできるのかと本当に涙が出た。

体力部会に載せるかどうかは今後、検討がいるかもしれない。キャリア教育部会で9年生像を描きながら1年生から積み上げていく中に、5年生からの部活動を載せる。これは相談かと思う。最後にすり合わせが必要になってくる。

**事務局**

今年度の年間予定について。9月30日を最終検討日とし、9月に2回組んでいるが、これは全資料の修正、確認をしたい。次回から7月、8月の3回にかけて、今挙げた作成資料を提示し、皆さんに検討していただく。担当の方の出席の都合もあるので調整する。原案としては、次回が部活動と先ほど出た運動遊び、そして7月に体育の器械運動の指導案と「体づくり」の授業検討。この体育の指導案は小と中のTTになるので、小学校と中学校の先生に入っただけ、調整しながら作ることができればと思う。

夏休みを経て「体づくり」、あと新体力テストの活用は、先ほどの指導事例案と3年から中3までの体力の足跡のような資料等を各会で検討し、9月10日に一度持ち寄って、修正等を経て9月30日に最終確認、そういう流れで持っていけないか。これから担当を検討して決め、どの回にどれを検討するか確認したい。

**委員**

部活動、「体づくり」の事例集は私がやる。

**委員**

指導案は、僕は6年を持っていて、マットか跳び箱どちらかで。

**事務局**

宮野先生に健康安全と体育的行事。

田中先生は、健康な体づくりの小学校部門で書いてもらう。

**アドバイザー**

新体力テストは小学校のものもいずれ出さなければいけない。

**事務局**

高橋先生が貫井中で副読本で使っているものの写しを、送っていただくことはできるか。

新体力テストの結果の活用の検討となっているもの、小学校の先生が見てこういうのもいるかもしれないと、加工する見本の意味であるといいのではないか。

**委員**

体力テストの活用のためにどういう指導をするか、指導の内容を書かなければいけない。

ワークシートなら記録させながら実際に子どもたちにどういう指導をすると効果的かを考えなければいけない。では私がやる。

**委員**

資料提供のような感じでお手伝いする。参考資料として部活動のつづりの今年バージョンを作り、中体連の細則や大会にかかわる運動系のものを網羅してすべて載せた。

**委員**

「体づくり運動」の事例集にもう1人中学から先生に入っただけがいい。

**事務局**

高橋先生の今までの経験をいろいろ情報提供していただいて、委員先生とどう発展するか、工夫できるかお示しいただきたい。

**委員**

私は指導案に入れてほしい。マット運動で小学校の指導案で、どういうふうに中学の教員が携わるか。

**委員**

ベースを作るので見ていただいて。中学の先生は基本的にT2で一応T1、T2の動きということしていきたい。

**事務局**

小学校1人なのが新体力テストの結果と、あと「体づくり」と運動遊びか。

**委員**

新体力テストの結果の活用をやってみる。

**事務局**

ここは小3から中3までの体力のあゆみで、子どもたちが作成できるものと、学活等を使った指導事例の作成になる。

**事務局**

使える資料があればお互い交換し合い、今あるものを活用していきたい。

**事務局**

この内容についてはこの日に行くというところで、今の委員先生のように、その時担当の先生が来られない日はあるか。

**事務局**

その日に持ち寄れるものをどんどんやっていると修正できない。その日に来られなくても資料を送ってもらうとよい。

**事務局**

次回の部活動は、委員先生に一応の資料はご提示いただいたので、事前にいただいた追加資料を皆さんに紹介するのでよいか。9月に最終的に全体を確認する機会もある。

では部活はこのままにする。ほかに急な事情等がある際には事前にお伝えいただければまた調整する。

今回は6月29日、東庁舎の4階会議室で15時半からお願いします。